

Contents Vol.219

2019.12.20

01 巻頭特集

- 1 大阪体育大学で開催
国際体操科学フォーラム
- 2 雨山祭
- 3 大体大PEOPLE
大村 武則・ラグビー日本代表マネジャー

09 NEWS

- 1 ハンドボール部女子 インカレ7連覇!!
- 2 西安体育学院 65周年記念式典に出席して
- 3 ライフデザイン・イノベーション研究拠点
国際シンポジウムに参加
- 4 プロ野球投手の上原浩治さん引退式
- 5 スポルテックウエスト2019
- 6 関西大学と合同シンポジウム

14 EVENT

- 1 ダッシュセミナー開催
危険な脳震とうへの対応を学ぶ
- 2 サンライズキャンプ2019
東日本大震災の被災地でボランティア
- 3 3年生向けキャリアフェスタ
- 4 野外活動部 創部50周年
福田芳則部長が記念講演
- 5 大学院・スポーツ科学セミナー
多彩な講師で講座充実

12 コラム「ボーシャー」

18 コラム「窓」



大阪体育大学で開催

国際体操科学 フォーラム



「招聘講演」

大阪体育大学が海外から招聘した体操のエキスパート4人が講演。それぞれの視点から、スポーツ科学を取り入れたコーチングや演技の採点方法について意見を述べた。

元カナダナショナルコーチで国際体操連盟科学委員会委員長を務めた経験を持つサスカチュワン大学名誉教授のキース・ラッセル氏は「コーチと科学者との間には大きなギャップがある。科学者は特定分野のスペシャリストだが、コーチは広い範囲で中程度の知識を持つジェネラリストであることが求められる。膨大な情報の中から体操指導に役立つ知識を拾い出さなくてはならない。コーチと科学を繋ぐブリッジビルダーが必要で、科学者は現場コーチへの教育方法を専門に学んでいるわけではなく、科学的知見を現場のコーチへうまく落とし込める人が少ない」とした。練習のやり過ぎで選手が体を傷めてしまうこともあり、バイオメカニクスやスポーツ科学の知識を取り入れることで「スマートで洗練されたコーチング」を目指す必要性を強調した。

国際スポーツバイオメカニクス学会



専門家4人が 「体操と科学」を語る



ガレス・アーウィン氏



キース・ラッセル氏



ウィリアム・A・サンズ氏



ジェフ・トムソン氏

の元学会長、ガレス・アーウィン氏は、体操競技の元イギリス代表選手であり、体操競技関連の科学的研究に多くの実績を持つ。バイオメカニクスやモーターコントロールをはじめとする科学研究とコーチングの統合に関して、科学研究が技の開発に貢献した例や、より安全で発展性のある技術の選択に、科学データが有益である具体例を紹介。さらに、男女間でルールが矛盾する問題について指摘し、「伝統や歴史的経緯、競技特性を踏まえたうえで、より客観的で普遍性のある採点規則作りにもバイオメカニクスのような科学が有用である」として、科学と実践の統合に関して、コーチングだけでなく採点規則作成への貢献可能性を主張した。

カナダトップレベルの指導経験に加えて約40年にわたり国際体操連盟公認審判を務め、現在の国際体操連盟技術委員であるジェフ・トムソン氏は、現在の体操競技の採点が減点中心になることの問題点に言及。歴史的には加点のルールが存在したこともあったが、審判の主観が入り込みやすかった問題に対し、「新たなテクノロジーやAIを用いた採点システムで客観的に測定できる指標を用いて、加点項目を設けてはどうか」と提案し、会場に熱い議論を生み出した。

選手、指導者経験を持ちながらアメリカの代表チームの科学研究サポートチームを長く率いた研究者で、国際体操連盟の科学委員経験もあるウィリアム・A・サンズ氏は、スポーツ科学の特殊性を明確に示すとともに、自身が用いたデータ蓄積手法や、選手管理、身体的準備、脂肪量測定、熱センサー（炎症反応の発見）、技術的な準備、ケガの発生要因分析など、科学をコーチングに応用した様々な具体例を紹介。「データに基づくコーチングと高いレベルで教育を受けたコーチが必要だ」と訴えた。



体操競技における「スポーツ科学と実践の統合」をテーマに、大阪体育大学は10月19、20両日、世界各国から著名な体操競技の専門家を招いて本学を会場に「国際体操科学フォーラム」を開催した。日々、選手を指導するコーチや、一流を目指してトレーニングに励む選手たちに加え、研究者や審判、体操クラブ経営者など、体操競技にかかわる約160人が参加。体操を愛し、体操の未来を考える熱い講義とディスカッションが繰り広げられた。

国際体操科学フォーラムは、大阪体育大学でスポーツバイオメカニクスを専門に研究し、男子体操競技部の監督を務める藤原敏行准教授（体育学部）が企画した。藤原准教授は「スポーツ科学と競技実践の関わりを体操関係者とともに考えることができ、とても貴重な機会になった」と話す。



国際体操科学フォーラム2日目は、1日目に続いて体操界のキーパーソンの講演や、座学から離れた体育館での実演など盛りだくさんな内容。体育館での実演メニューでは、スポーツ科学を取り入れたトレーニングや世界的に著名な指導者によるワークショップに参加者は熱心に動画撮影するなどし、体育大学ならではの参加型フォーラムとなった。

「トレーニング・ワークショップ」

元中国代表チームのヘッドコーチが指導

1989年から2017年まで約30年間、中国で体操ナショナルチームのヘッドコーチを務め、大阪体育大学の客員教授に就任したファン・ユービン氏が、男子のあん馬と女子の段違い平行棒で技術指導講習を行った。ファン氏は「あん馬は男子種目の中で最も不安定で失敗しやすい」と言い、トップスポーツクラブに所属する選手らの体に手を添えて美しい形を教えたり、トレーニング方法をアドバイスした。ファン氏は男子の鉄棒の技術を女子の段違い平行棒に応用した第一人者であり、この日も女子選手にダイナミックな演技ができるようなポイントを伝えながら指導した。



【体操体育館測定デモ】

藤原准教授が大阪体育大体操競技部の練習用体育館で、あん馬の水平面運動の雄大性を即時評価するシステムや、トレーニング中に加わる力の強弱をリアルタイムで測定評価して、映像とともにフィードバックするデモンストレーションを実施した。カセンサーを組み込んだつり輪や、フォースプレートを埋設したマット上で、体操選手が技を披露し、その際のデータをディスプレイに表示。体操の練習ではコーチが選手の体を支えて教えることも多いが、「どれぐらいコーチに支えられているのか」のデータがリアルタイムで分かり、それを藤原

藤原准教授が「力の可視化」を披露

准教授は「力の可視化」と称した。通常は映像に映らない力が可視化されることで、競技トレーニングやコーチングに幅広く応用できる可能性を持つとともに、体育大学生の教育的側面から、運動力学的理論の体験的理解にもつながるという。

「講演」

2日目の講演は、今、体操界で注目を集める2人が登壇した。

子供を対象にした体操のジムを国際的に展開する「インスパイア



リャン・チェン氏

体操界で 注目の2人



佐藤 寛朗氏

2日目の講演は、日本体操界のエース、内村航平選手の専属コーチ、佐藤寛朗氏。2016年に内村選手が日

本初の体操プロ選手となるのを機に専属コーチになった。自身も5歳から体操を始め、10歳の時に体操クラブの合宿で一つ年上の内村選手に出会った。同じ高校に進学し共に体操に青春を賭けた間柄だ。2人が高校時代に指導を受けたコーチは、故・小林隆氏。フォーラム初日に講演したキース・ラッセル氏が、講演の冒頭で「科学とコーチングを高いレベルで統合した」と紹介した人物で、2015年から2018年に他界するまで大阪体育大学でコ

「Ad」(Kids Physical Literacy)という概念を提唱し、運動基盤形成期と呼ばれる3歳から8歳までの子供を中心に、心身の発達を促進する自社の独自メソッドを用いた運動プログラムを提供している。運動能力が高くなる

だけでなく、社会性を身に着けたり、認知力が上がるなどの効果が期待できるといふ。これまでに膨大な量の子供の運動能力データを蓄積しているだけでなく、近年生み出した新たな概念「SD」(Senior Physical Literacy)が高齢社会の日本においてますます重要となることを訴えた。また、最新テクノロジーを駆使したジムや会員管理システムの紹介は、日本の関係者には大きな刺激になった。

「そのコーチは体づくりの前に心構えが大切だとも教えてくれた。常に感謝の気持ちを忘れない人間としての謙虚さ、静かなる闘争心、その上に強靱な体、そして究極を目指した技術、世界の頂点はその上にあると。内村選手はいつもそれを書いたコーチの手紙を持って競技大会に臨んでいる」と披露し、磨かれた心と体が一つになって高度な技が成り立つ体操競技の本質を述べた。

「特別シンポジウム」

スポーツ科学と体操のコーチングを深掘り

フォーラムの締めくくりとして行われたシンポジウムには、海外から招聘した専門家がパネラーで並び、会場からも活発に質問が出た。主な発言を紹介する。

先日の講義で述べたように、コーチは幅広いスポーツ科学的知見を持つべきである。それらをコーチに浸透させていくことは、それほどたやすいことではないが、我々は挑戦を続けるし、

コーチの方々にもそれぞれのコーチングに科学的知見を取り入れる努力をしてほしい。しかし、注意すべきは、科学は体操をもっと理解するためにも必要であるが、科学でコーチをするわけではないということ。佐藤寛朗さんの講演にもあったように感覚が重要になってくる。科学的に動作を説明しても選手に伝わらないことが多い。コーチは科学を理解しながら、選手に説明する時には選手がその動作をイメージし

やすい言葉で伝えることが重要だ。

(キース・ラッセル氏)

まず、科学の役割と機能を考えなければならぬ。科学はトレーニングをもっと効果的、効率的、そして安全にするための知識と情報を与えてくれる。このフォーラムで科学がいかに競技コーチング、トレーニングの環境の改善、より公平で透明性のある採点評価に生かされるかということが議論され

てきた。しかし問題はコーチがそれらの知識を得られないことが多いということ、もっと実践に科学を統合していくためには、国際あるいは国内の競技団体からのトップダウンのアプローチが必要である。最も大事なことは選手を中心に置きながら、各領域の科学を別個に扱わず、コーチのための科学をもっと学際的に見ること、体操実践を通じて出てくる様々な疑問に対し、学際的に回答を探していくことが大切である。

(ガレス・アーウィン氏)



ハードなトレーニングはもちろん、きちんとした指導を受けなくてはトップレベルのスキルを身に着けることができない体操競技は、世界で最も難しいスポーツだ。例えば、東京オリンピックで正式に採用されたスポーツクライミングの世界チャンピオンの多くは、コーチに指導された経験を持たない。スポーツクライミング競技を下に見るわけではないが、ほぼ全てのトレーニングセッションで細やかな指導が必要となる体操競技がいかにユニークで、その指導がいかに複雑かということ

理解されるべきだ。そして私は、審判（採点評価）が選手の成長にこれほど大きな影響を与えるスポーツを他に知らない。コーチと審判を含む運営サイドの協力が不可欠で、客観的に公正で透明性のある評価がなされるためには、科学と科学技術を使う必要がある。また、群を抜いて素晴らしい実施（技）に対して、客観的な基準で加点を考慮することもできる。今朝の体育館で見たようなあん馬の旋回の雄大性などは、そのような加点を客観的な基準で与えるのに適した良い例だと思う。

（ジェフ・トムソン氏）

コーチングはティーチング（教えること）ということをは忘れてはいけない。科学はその背景にあつて、より良いティーチングを支えるもので、自分の知らないことを教えることはできない。ここにいるコーチ達に是非、伝えたいのは、エビデンスに基づいたコーチングを行うこと。エビデンスは実験室で得た精密なものでなくてもいい。自分の身の回りにあふれているものでいい。スポーツ科学者が覚えておくべきことは、スポーツ科学者の仕事は選手とコーチの問題解決に貢献すること、自身自身の問題を解決することではないということだ。コーチは科学そのものに関心があるのではなく、抱えている問題を解決してくれるものとして科学を求めている。

（ウィリアム・A・サンズ氏）

interview

Toshiyuki
Fujihara

国際体操科学フォーラムを企画した藤原敏行・体育学部准教授は大阪体育大学出身。自身も大学生まで体操選手だった。その後、指導者として常に体操競技の現場に身を置きながら、バイオメカニクスの研究者となった。今回の企画に至った背景や開催の意義について聞いた。

（インタビュアー O U H S ジャーナル編集長・和泉かよ子）

——まずは、フォーラムの成功おめでとございます。

藤原 ありがとうございます。この度は非常にありがたい機会を与えていただきました。ゲストスピーカーの方々も今回のようなフォーラムの必要性和重要性を認識されていましたし、研究者、現役の選手、指導者、審判、企業関係者など立場の異なる多くの方々にご参加いただけたことも意義のあることであつたと思います。体操にかかわる人々に広く、トレーニングや指導、ルールの作成や採点評価において、科学的研究と競技実践がどのような関わりを持つていくべきなのかについて、



藤原 敏行准教授

——「実践と科学理論の統合」というテーマですが、裏を返せば、体操競技はまだまだ指導者の経験や勘で選手を育てていく職人的なやり方が一般的ということでしょうか？

藤原 まず、体操競技自体が測定競技ではないということがあります。より速く、より高くを競うスポーツではなく、「見栄え」が勝負の競技なんです。例えば、宙返りなどでも高い方がよいのですが、厳密に跳んだ高さを測定して採点しているわけではありません。高く跳んだような印象を審判に与えることも一つの技術になります。体操競技の目指す美しさや迫力を、高さ、角度、速度などの数値で表すことは、少なくとも現代の測定技術では限界があります。このような競技特性に加えて、自然科学的なデータの測定に関する労力や時間を考慮すると、さらに現場には馴染みにくい。馴染みのないデータや理論を資料として提供されても、その

有益性は伝わりにくいと思います。

また、日本の体操界は特に諸外国と比べ、西洋科学的な研究から距離を置いていると見られています。その要因は単純な話でないのはもちろんですが、あくまでも個人的な私見として一因を挙げると、日本における体操競技と「マイネル・スポーツ運動学」の関係が少なからず影響していると思います。このマイネル・スポーツ運動学は現代のスポーツ科学に多く用いられる自然科学的な分析の手法とは異質なもので、人の運動における主観的な感覚と質的な評価を大切にします。この学問領域を日本に紹介して発展させた人物が、日本の体操界に多大な貢献をされた金子明友先生です。日本ではマイネル・スポーツ運動学と体操競技の関わりは非常に深いと言えます。マイネル・スポーツ運動学を通じて多くの研究成果が日本の体操の発展に大きく貢献してきた一方で、分析科学的なデータの測定や研究にはあまり日が当たらず、それらが発展的に取り組まれる機会も生まれていなかったと思います。

——カナダに留学された時の経験が、今回のフォーラムでも生きましたね。

藤原 2006年～2011年、カナダのアルバータ大学に留学する機会に恵まれ、バイオメカニクスを中心に研究しながら体操競技の指導に携わりました。フォーラムで招聘したゲストはまさに、この留学時の経験を足掛かりにつながっている人々です。国際的に活躍されている素晴らしい方々と、個人的にお話ができるのは大変ありがた

く思います。

しかし、それぞれの方と個人的な意見交換をするだけではなく、このような方たちが一堂に会して議論し、その内容をもっと多くの方と共有できることは、非常に有意義であると感じていました。企画案を持っていても、とても1人で実現、運営できるものではありませんが、東京オリンピックや体操界における自動採点の流れ、学内におけるスポーツ局の開設や特色あるプロジェクト研究といった様々なタイミン

グの関係で、今回のフォーラムの企画、実現に至り、うれしく思います。

——留学先にカナダを選んだというのは、体操競技のレベルが高いからですか？

藤原 カナダを選んだ直接的な理由は、私を博士課程の学生として受け入れることに前向きな返事をいただいたピアー・ジャーヴェイ教授が、カナダのアルバータ大学におられたこと、そしてそこでは体操競技の研究を進めるだけでなく、高いレベルの競技実践現場に身を置ける可能性があったことです。留学前に競技指導に携われるような機会が保証されていたわけではありませんでした。少なくとも大学のあるエドモントンという街にはカナダ代表の有名選手がいることは知っており、飛び込んでいきました。国際的な競技成績で言えばカナダより日本の方が上ですが、競技成績の順位だけがそのままコーチングのレベルを表しているわけではないと思っています。それぞれの国、地域の社会情勢や文化なども複雑

に影響する中で、少なくとも指導者育成のシステムや体罰問題などは日本よりも先進的に取り組まれています。実際にやってみて感じたことですが、日本ほど「勤勉」でない選手も多いので、より優れたコーチングが必要になるのかもしれない。さらに、カナダは多民族国家でもあるので、中国、ロシア、欧州各国から来たコーチもたくさんいて、様々なコーチングに触れる環境があり、学ぶところは想像以上に多かったです。

——フォーラム2日目、体育館で計測器を付けたつり輪を使ってデモンストレーションされましたが、本学体操競技部の練習でも「力の計測」は取り入れているんですか？

藤原 はい、そのような取り組みにまさに挑戦中です。トレーニング中のつり輪に加えられる力の強弱が、映像とともにディスプレイに表示される「力の可視化」は、トレーニングに活用できる可能性があります。力というのは、動きの変化を生み出す力学的にも重要なものですが、運動中の人の感覚にも大きく関わります。しかし、単なる映像では、力が働いた結果としての動きは見えますが、動きの原因となる力は見えません。それが一部可視化されることで、運動の理解は深めやすくなります。また客観的な数値は、他人との比較をしやすくなることはもちろん、自分の主観的な感覚を磨くことにも使えます。

手軽に日常的に測定できるというのが重要で、それによって客観的な数値

と主観的な感覚がだんだん一致してきて、数値が意味を帯びてくる。体温計のようなものですね。体温計は日常的に使用して、自分の体調と体温の関係を経験的に理解しているからこそ、摂氏39度という数値が感覚的に理解できる。そもそも36度や39度という体温の数値と経験的で主観的な感覚が一致していなければ、その数値はあまり意味をなさないので。

——バイオメカニクスは体操競技を発展させるでしょうか？

藤原 力学、生理学、解剖学などの基礎学問分野をベースにして、人の運動を応用的に考えていく学問がバイオメカニクスです。力学など自然界の運動の法則について人類は2000年以上かけて蓄積してきているわけで、それに生き物としての人の身体に関する生理学や解剖学の知見を合わせながら動きを分析していくバイオメカニクスは、体操競技に限らず、人の動作や運動メカニズムを考えるうえで、非常にパワフルなツールとなります。

要は使いようではないでしょうか。バイオメカニクスを使わずとも体操競技は発展できるし、バイオメカニクスの知識を持たずとも優れたコーチもたくさんいます。しかし、バイオメカニクスや他のスポーツ科学分野の力をうまく活用できれば、活用しないよりもさらなる発展や成長につながるのではないかと考えています。

52th Ameyama 雨山祭

「ともに」をテーマに 地域ぐるみで盛り上がる



大阪体育大学の学祭「雨山祭」が10月26、27両日、行われ、ステージ上のパフォーマンスやテントでの物販などで大いに盛り上がった。今年のテーマは「ともに」。雨山祭実行委員会の田中雅也委員長（体育学部2年）は、「学生、教職員、地域の人々、みんなとともに楽しもうという意味を込めました」と話す。雨山祭は近年、参加者が増加しており、ステージでの「のど自慢大会」には、「応募が多くて出場者を抽選しなくてはならないほど」と田中委員長。観客席は満席で、日ごろの練習の成果を発揮する出演者には大きな拍手と歓声が送られた。

ステージを取り囲むように並んだテントでは、学生たちが焼きそば、ギョーザ、チョコバナナなどのグルメを提供したほか、地元の手話サークルなどが小物や衣料品を格安販売するバザーを実施。地域ぐるみのお祭りとして地元浸透してきた。体育大学ならではのイベントとしては、競輪選手を養成する公益財団法人が「ペダリングチャレンジ」として脚力を競うコーナーを展開。体育系のクラブで鍛えた学生たちが次々にマシンに乗って健脚を披露した。家族連れで訪れた教職員の子供と学生らが一緒に遊んだり、学生の保護者らも多く来場し、「大体ファミリー」の笑顔が会場いっぱい広がった。



田中雅也委員長



大村武則（おおむら・たけのり）
1965年6月4日生まれ。京都府宇治市出身。
大阪体育大学体育学部卒、20期生。ヤマハ発動機、
セコムでラグビー部のトレーナーやマネジャーを
務め、2009年からラグビー日本代表マネジャー。

僕はラグビーに やり残したことがある

ラグビー日本代表マネジャー
大村 武則さん

日本列島を興奮の渦に巻き込んだ「ラグビーワールドカップ2019」が閉幕し、メディアのラグビー熱も収束した11月中旬、東京都港区にある日本ラグビーフットボール協会（JRFU）の事務所を訪れた。日本代表チームの大村武則マネジャーに会うためだ。大阪体育大学の広報誌で取り上げたいと取材を申し込むと、「僕みたいなショボいやつでいいんですか？ もっとすごい人がいるでしょう」と危うく断られそうになったが、「後輩たちにメッセーじをお願いします！」と頼んでOKしてもらった。

段ボールが山積みになされた部屋で大村は、電話対応、大量に届くメールに返信、翌週からの海外出張の準備と多忙を極めていた。W杯の余韻に浸る暇はなく、「ブレイブ・プロッサムズ」はもう次に向けてスタートを切っていた。

2009年にJRFU総務（マネジャー）に就任した大村は、この10年でジョン・カーワン、エディ・ジョーンズ、ジェイミー・ジョセフと3人のヘッドコーチ（HC）に仕えた。「3人ともタイプが違い、目指すチーム像も違った」と大村は言う。選手時代、スーパースターだったジョンは、そのカリスマ性にみんなが引き寄せられてチームが出来上がっていた。エディはトップダウンで何から何まで細かく取り決め、「これをすべてきっちり実行すれば勝てる」と徹底した管理主義を敷いた。現在のジェイミーはエディとは真逆のボトムアップ型で、チームの課題を解決する方法を選手に考えさせるという。

ジェイミーは「ワンチーム」というキーワードが流行語にもなった。大村は「それだけ一つになるのは大変だ」という裏返しです」と話す。日本代表のメンバーはそれぞれ自身の所属する実業団チームではエースの選手ばかり。プライドの高い猛者たちは、放っておいたら各自が自己主張してまとまらないという。

「ジェイミーは『チームは家族、兄弟だ』と。そして、日本代表という立場がいかに素晴らしいか、どれほどみんなの憧れなのかを選手に説く。そこで『よっしゃ、チームのためにやっつたろう』って気持ちになるんです」

HCのチーム作りを裏で支えるのがマネジャーだ。日本代表チームはキャンプや海外遠征で年間130日、200日、行動を共にする。切符の手配、宿の手配、食事の面倒などなどロジスティクスが大村の仕事だ。

「虎の穴みたいに練習だけさせりゃいいというものでもなくなってるね。右を向いても左を向いてもむさ苦しい男ばかりの生活。結構ストレス溜まるんですよ。自由時間がないとぶりぶり文句が出るし、ホテルの部屋だって荷物の多さを考えると一定の広さは必要だし、なるべくストレスを軽減するマネジメントも考慮しなきゃいけない」と苦笑する。

大村は20代で選手生命を絶たれ、裏方に回ったいきさつがある。

子供の頃からスポーツ大好き少年だった。進学した京都の府立高校では陸上部に入学したが、3年の春に右足首

を骨折。クラブ活動を休止中、体格の良さと俊足にラグビー部から目を付けられ「秋の大会に出ないか」と誘われた。「大会で1勝できたら上出来」ぐらいの弱小チームだったので、特別なトレーニングはしなくても試合に出場できた。「ただボールを持って走っているだけだった」と言うが、人材を探しに試合を見に来ていた大阪体育大学ラグビー部の坂田好弘監督（当時）に、試合後、握手を求められた。「一緒に同志社大を倒そう」と熱く語る坂田監督に共鳴し、大阪体育大学に入学する。

坂田監督は体を大きく鍛え上げるフイジカル面に重点を置いてチーム強化していた。大村が2年の時、大阪体育大学は関西リーグ戦で強豪、同志社大学に勝利した。71連勝中だった同志社大学の敗北は10年ぶり、しかも34対8という大差での圧勝。体重100^{キログラム}級のフォワードを揃えた大阪体育大学ラグビー部は、「ヘラクレス軍団」と呼ばれるようになる。

大村はニュージーランド留学を経て、帰国後は実業団チームに入るつもりで準備していたが、クラブチームの試合に出場して脳震とうで倒れる。3日間、目が覚めなかった。「意識が戻った後もパンチドランカーみたいなもの。歩くのもフラフラし、肩を軽く叩かれただけでも体が崩れそうになる。とてもラグビーを続けられる体ではなくなってしまう」

ニュージーランドでは選手の身体的ケアをするトレーナーがいたが、当時、日本ではまだ珍しかった。大村はトレー

ナーになる決意をし、専門学校に3年通って鍼灸師の資格を取る。ヤマハ発動機で11年トレーナーをした後、チームマネジャーに。「選手の体調を見るのに一緒に走っていたのですが、年を食って同じペースで走れなくなってしまう、マネジャーになったんです」。ヤマハ発動機のチームマネジャーを1年やり、セコムのチームディレクターを4年務めて、そこから現在のポストに就く。

スポーツの世界でマネジャーは「縁の下力持ち」と称されるが、大村は「縁の下にいろのは確かにそうだけど、力持ちではないですね」と言い、W杯のスコットランド戦を例に挙げた。

台風19号が関東を直撃し、横浜国際総合競技場で10月13日に行われる日本対スコットランド戦は開催が危ぶまれた。鶴見川から溢れた水は遊水地の競技場に流れ込み、大村は競技場の管理スタッフと13日未明まで連絡を取り合った。試合がしたいというチームの意

向に沿い、あの夜、競技場のスタッフは徹夜で排水作業をしたという。徹夜の奮闘があったからこそスコットランド戦があり、日本代表チームはW杯史上初めて8強に入る快挙を成し遂げることができた。

「選手がプレーできる環境が整うのは、縁の下にとつともなく大勢の人がいるからです。みんながマネジャーの僕と同じ思いで重い床を支えている。アスリートはそのことを決して忘れてはいけない」

選手、トレーナー、マネジャーと立場を変えながらも大村の人生はラグビーから離れることはなかった。なぜラグビーにこだわり続けるのか？

「僕はラグビーにやり残したことがある」1987年、大阪体育大学は大学選手権で明治大学を破り、大阪体育大学史上、初めてベスト4に入った。4年の大村は留学先のニュージーランドから帰国していたが、この試合には出場

していない。「実力不足で試合に出られなかっただけ」と受け止めつつも、「あの時、チームの勝利に貢献できなかった無念さが、今も自分をラグビーに繋ぎ止めている」と打ち明ける。

「日本のラグビーが強くなっても、代表チームが強豪国を倒しても、それは僕の手ではなく選手が頑張ったから。このW杯を終えても、僕の中の『やり残したもの』は消えていない。それを消してくれるのが何なのか、僕自身にも分からない。やれるだけのことをすべてやった、と心から思えるまで、僕はラグビーと関わり続けるしかない」

大村は32年前にラグビーの神様から宿題をもらったのかもしれない。次のW杯は「家で炬燵に入り、酒でも飲みながらテレビ観戦したい」という思いもあるが、それは宿題が片付いていれば、の話である。

【OUHSジャーナル編集長 和泉かよ子】

大阪体育大学ラグビー部へのメッセージ

夢は見るものではなく手に入れるもの。準備する、計画する、実行する、これを徹底的にやれば夢は実現できる。

※写真は、公益財団法人 日本ラグビーフットボール協会提供





ハンドボール部女子

インカレ7連覇!!

優勝記録
2年連続更新



秋山静香 (体育4年)



榎和奏 (体育4年)

「高松宮記念杯男子第62回・女子第55回 令和元年度全日本学生ハンドボール選手権大会」(インカレ)が11月8日～12日、宮城県利府町のセキスイハイムスーパーアリーナ「グランディ21」で開催され、大阪体育大学ハンドボール部女子が史上初の7連覇を達成した。

女子ハンドボール部は初戦から圧勝を続け、11月12日の決勝戦、筑波大学戦に臨んだ。試合開始30秒で中山佳穂(体育3年)がシュートを決め、勢いに乗った大阪体育大学は次々と得点を重ね、前半を19-9で折り返し



中山佳穂 (体育3年)



楠本繁生監督



相澤菜月 (体育3年)



尾辻素乃子 (体育2年)

た。後半の序盤は筑波大学のディフェンスに阻まれるが、ゴールキーパーの榎和奏(体育4年)がファインセーブを連発してチームの士気を高めた。終盤は攻撃力が盛り返し、31-19の大差で筑波大学を下した。

昨年の大会で、女子ハンドボール部は6連覇を達成し、日本体育大学の持つインカレ5連覇の記録を44年ぶりに塗り替えた。今年はそれを更新し、前人未到の領域を突き進んでいる。

決勝戦の後、大阪体育大学体育学部准教授の楠本繁生監督は、「今年のチームは選手個々の

能力と言うよりも、チームのトータル力が強くなってきた。インカレ7連覇という重圧を感じながら戦ってきた選手たちにとっては、苦しい大会だったと思う。この1年間、目標に向かって苦しみ、もがいてきた選手たちが最高の結果を出すことができたのは、監督としてうれしい限り」と話した。

表彰では、優秀選手賞に榎和奏、秋山静香(体育4年)、相澤菜月(体育3年)、中山佳穂、尾辻素乃子(体育2年)が選ばれ、楠本監督は優秀監督賞に輝いた。



楠本監督を胸上げ!



西安体育学院

65周年記念式典に出席して

体育学部教授 梅林薫

西安体育学院の開学65周年記念式典が、2019年9月21日、22日にわれ、大阪体育大学からは、副学長の福田芳則教授、全学国際地域交流委員会のメンバーであるウエイン・ジュリアン教授（体育学部）、竹内亮教授（教育学部）、そして委員長の私の4名が出席した。

21日午前には西安体育学院大学内の講堂で、中国国内の体育系大学関係者を始め、約1500人が参加して盛大に式典が行われた。昨年度本学にも来られた朱元利院長が冒頭に西安体育学院の歴史に触れながらあいさつし、主賓として福田副学長が祝辞を述べた。午後には、西安体育大学と交流のある招待国（7か国）とのサミット会議が開催。本学からは、竹内教授が本学の学部（体育、教育）の教育活動や自身の研究内容を発表した。他には、中国（北京体育大学）、韓国、スペイ

ン、ロシア、ウクライナ、ドイツの6か国が、それぞれの国の体育・スポーツ事業などについて発表、情報交換が行われた。本学（日本）を含め、これらの国の友好の証として「シルクロード交流」と題し協定締結を交わした。

22日午前には、西安体育学院とそれぞれの国とのミーティングが行われた。本学も今後の交流活動について1時間程度、情報交換を行った。西安体育学院と本学は、1986年に学術協定を結んで以降、34年間、活発に人的交流して多くの成果を収めてきた。新世紀を迎え、日本・中国両国の体育事業はめまぐるしいスピードで発展している。互いに異なる文化と歴史を持つ両国の体育大学が、将来に向けて学術・スポーツ交流をさらに深め、友好関係と共同发展を促進していくことを改めて約束してこの式典の幕を閉じた。

ライフデザイン・イノベーション研究拠点 国際シンポジウムに参加

健康を基軸とした生活の質の向上に寄与するのを目的とし、様々なパーソナルデータの活用を推進する「ライフデザイン・イノベーション研究拠点国際シンポジウム」（同研究拠点主催）が11月1日、大阪市北区のグランキューブ大阪で開催された。

大阪体育大学は下河内洋平教授（体育学部）の研究室が同研究拠点のプロジェクトに参加しており、シンポジウムで研究内容を発表した。

同研究拠点は、大阪大学が文部科学省の2018年度「Society5.0実現

化研究拠点支援事業」に申請して採択された事業。大阪大は理化学研究所や各企業と連携して進めており、他大学からも事業の趣旨と合うテーマを持つ研究者らが参加している。大阪体育大の下河内教授の研究室は、立った状態で足を折り曲げる動きのスムーズさが「運動能力の決め手」になるという仮説を立証するため、高齢者やアスリートの「下肢伸張性収縮制御能力」を

計測。現在、定量的な評価指標がない「関連性」の解明を試みている。下河内教授は「下肢伸張性収縮制御能力を上げるのは、アスリートの競技能力向上にとどまらず、ケガをしにくくなる効果もある」とし、さらに「加齢によって歩いたり走ったりするのがつらくなるのを防止する」と足腰のアンチエイジングに有効だと説明。「スマートウォッチでこの能力を計測し、結果をフィードバックできるようなシステム開発につなげたい」と話した。



下河内洋平教授（右）と峯田晋史郎研究員（左）

上原投手、大体大にレガシーをありがとう！

プロ野球投手の上原浩治さん引退式

硬式野球部OB会が主催



中野監督から上原さんに花束贈呈

大阪体育大学が生んだスーパースター、上原浩治さん（31期生）がプロ野球選手を引退したのを受け、硬式野球部OB会が主催して12月8日、大阪市中央区のホテルニューオータニ大阪で「上原浩治投手引退パーティー」を開催した。卒業生と現役の学生ら約230人が参加し、マスコミ関係者も多数取材に来て盛大な会となった。

主催者の藤瀬史朗OB会長は「12月の忙しい中、これだけの人が集まった。この空間で賑やかに大阪体育大のヒーロー、上原浩治投手の労をねぎらっていただければ」とあいさつ。来賓を代表して学校法人浪商学園の野田賢治理事長は「ファンの1人としてマウンドに立つ姿をもう見れないのは寂しい。中学校の

教壇に立つ卒業生は生徒たちに『二つのことを信じて続ければ世界一になれる』と上原選手の話をしている。今後の去就が注目されているが、大阪体育大学としては、是非、野球部の監督になってほしい。そんな気になったらよろしくお願いします」とアプローチした。

上原さんは大阪体育大学の野球部で、主戦投手として阪神リーグで5度の優勝に貢献。阪神大学野球連盟の井本康則理事長は「上原投手の学生時代、私はほとんどの試合を見た。あれから20年近く経っても、上原投手が阪神リーグで残した記録は破られていないものがある。4年間の通算勝利数36勝、1試合で21奪三振、無失点完封試合12試合。阪神リーグでこの記録に迫る選手は未だにいない」と功績を称えた。

大阪体育大野球部の中野和彦監督、野球部創設時のメンバーである吉田精二・元部長、上原さんの3人が壇上に上がって会場からの質問に答えるコーナーでは、OBや現役学生から活発に手が挙がった。応答の中で上原さんは「野球部に大学専用グラウンドがないのを残念がり、学生時代は吉田元部長が土手の草刈りをして整備した「上原ロード」をチームメートと走っていた話を披露。「野球部が強くないと大学は盛り上がりがない。専用練習場がないと強くない。野球部にグラウンドをお願いします！」と要望して会場を沸かせた。後輩たち向けには「日本一になって熊取町でパレードしてほしい」と持ち前のウィットに富んだトークで激励した。



（左から）吉田元部長、上原さん、中野監督のトークショー

最後に、吉田元部長とともに創部時代の部員だった石原英敏さん（2期生）が「寄せ集めの学生で作った弱小チームでスタートした」と振り返り、「あれから約50年、こんな立派なパーティーが開けるようになった。上原君、レガシーを作ってくれてありがとう」と礼を述べて会を締めくくった。会場では上原さんを囲んだ記念撮影の輪が絶えず、久しぶりに顔を合わせた卒業生たちも話に花が咲き、パーティーの予定が終了しても盛り上がりはなかなか収まらなかった。



ハカと陣形

今回は、10月26日のラグビーW杯準決勝ニュージーランド・イングランド戦でのハカについて陣形の視点から自分勝手な妄言を書く。

あの日のハカは異様だった。ニュージーランドのハカが始まるやいなやイングランドが大きく動き出した。即座に私は「陣形だ」と叫んだ。まさに戦国時代の合戦を見ているようで興奮した。

どうして陣形と思ったのか。むかし大学院で不当利得法を研究していた頃、国際法の研究で高橋一等海尉が内地留学をしていた。食堂でよく一緒にいた。そのうち酒を飲み交わすようになり、いつのまにか肝胆相照らす仲となった。彼から様々なことを教わった。その中に戦国時代の陣形の話があり、面白く魅了された。真偽は定かでないが、こんなエピソードがある。関ヶ原の合戦で西軍は多勢でもって鶴翼の陣を張り、これに対して東軍は魚鱗の陣で対峙した。数が優位な時、鶴翼の陣は相手軍を包み込むようにして殲滅する不敗の陣形である。明治に入り、プロイセン参謀総長モルトケ元帥の推薦で日本に派遣されていたメッケル少佐は、この陣容を見て、西軍の勝利を信じて疑わなかったそうだ。しかし西軍は負けた。

閑話休題。まずニュージーランドが動いた。ハカで鋒矢(ほうし)の陣を張った(写真右側)。この陣形は機をみて先端が左右に開き後衛の騎馬が突進するものである。次にイングランドが動いた。これまでのチームはハカの終わるのを待ただけであったが、イングランドは違った。ハカを陣形とみなし、鶴翼の陣を整えた(写真左側)。この陣形でニュージーランドを大きく包み込み、一兵といえども逃さない姿勢をみせた。こうしてハカの儀式は戦いの陣容に変容した。見事な作戦である。

私は一連の動きを見て驚愕した。写真で分かるように、イングランドの圧が圧倒的に強いのである。

そこで陣形の視点から私見を述べる。ニュージーランドは、即座に鋒矢から長蛇の陣形に変化すべきであった。長蛇の陣は、イングランドのV字の両先端よりも長く横に並ぶ陣形である。これで包み込まれず、両端は背後を突けるのである。しかしニュージーランドはハカの儀式をしているだけであり、イングランドの動きに対応できなかった。この時、戦いの火ぶたは既に切られていたのである。(文中の陣形は甲陽軍鑑で紹介されているもの)



盛大に行われた引退パーティー



藤瀬史朗・硬式野球部OB会長



井本康則・阪神大学野球連盟理事長



石原英敏さん



野田賢治・浪商学園理事長



上原さんを囲んで記念撮影

スポーツテクニクウェスト2019

大学スポーツの振興を目指して

西日本最大のスポーツ・健康産業総合展「スポーツテクニクウェスト2019」が11月20日～22日、大阪市住之江区のインテックス大阪で開催された。大阪体育大学はブースを出展、セミナーにも参加した。



ブースで大阪体育大学をアピール

セミナーのパネルディスカッション



スタートした。KCAAの副会長でもある藤本教授は「大学スポーツの英知を共有するためのプラットフォームであり、ネットワーク」とし、各大学が互いに磨き合うのが目的だと述べた。スポーツ活動のモデルとなる個人活動を表彰する「KCAA大学奨励賞」で、アスリートだけでなく裏方の人材にも光を当てていると紹介。浦久保ディレクターは「クラブ紹介のホームページを作成したところ、選手たちから好評を得た」と大阪体育大の取り組みを披露した。パネルディスカッションでは、大学スポーツを盛り上げる方法として「観客を増やす」ことがテーマの一つになった。まずは学内で「うちのチームの試合を応援に行こう」という機運を作るのが大切だとして、インカレ以外にも学校

対抗戦を実施したり、新入生向けのプログラムに大学戦の観戦を盛り込むなどの例が挙げられた。

「大島鎌吉つながり」で 関西大学と合同シンポジウム 大阪体育大の学生アスリート2人が登壇



坂本達哉（大学院1年）

福岡歩（体育学部4年）

「大学スポーツとオリンピック・パラリンピックの精神」と題し、11月30日、大阪府吹田市の関西大学千里山キャンパスで、大阪体育大学と関西大学の合同シンポジウムを開催した。1932年ロサンゼルスオリンピック三段跳びの銅メダリストで、1964年の東京オリンピックで日本選手団長を務めた本学の大島鎌吉・初代副学長は、関西大学の卒業生。「大島鎌吉つながり」で実現したシンポジウムは、2020年に東京オリンピック・パラリンピックを迎えるにあたり、大学スポーツやスポーツの意義について議論が行われた。

第1部では、「大学スポーツの展望とUNIVASの役割」について、一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）の池田敦司・専務理事が講演。

続いて行われた第2部は、大阪体育大学、関西大学からそれぞれ2人の学生アスリートが登壇し、「大学生アスリートにとっての勉強とスポーツ」をテーマに対談した。本学からは、陸上競技部（やり投）の坂本達哉（大学院1年）となぎなた部の福岡歩（体育学部4年）が、学業との両立などについて述べた。

来年の東京オリンピック出場を目標にしている坂本は「体育大学なのでスポーツに関する授業が多く、学んだことをすぐ練習の場で生かせる」と学業は競技力向

上に有効だとし、「大学を卒業しても競技を続けていける環境であったり、社会人として働きながらアスリートができる考え方が広まっていけば、日本のスポーツ界はもっと発展していくと思う」と語った。福岡は「スポーツ心理学の授業でメンタルの鍛え方を学び、心を落ち着けて試合に臨むことができるようになった」と専門的な学びがなごなたに役立つ例を紹介。後輩たちのために、学生アスリートにどのような支援があればいいかを問われ、「私は片道2時間かけて通学しているので、勉強時間の確保が大変だった。大学の近くに大学寮があれば、通学が楽になって勉強ができ、食事の管理もしてもらえると栄養面が充実してスポーツにも生かせると思う」と述べた。

本学の岩上安孝学長は閉会のあいさつで、スポーツ、オリンピックが世界平和にどう貢献できるかを語り、盛況のうちに閉会した。



中山晴雄講師の講義



大阪体育大学スポーツ局が主催するダッシュプロジェクトセミナーの第2回が11月1日、スポーツ現場の安全管理をテーマに大阪市北区の研修センターで開かれた。アスレティックトレーナーらが参加し、専門家の講義とともに、体験型のワークショップも行われた。

ダッシュセミナー開催

危険な脳震とうへの対応を学ぶ

身体に強い衝撃を受けるスポーツによるケガで深刻なものの一つが脳震とうだ。東邦大学医療センター大橋病院脳神経外科の中山晴雄講師が「頭部外傷から選手を守る——現場における安全な対応について——」と題して講義した。スポーツ中のケガのうち頭部のケガは5〜9%とされるが、競技中に意識不明になってもすぐ意識が戻ってプレーが再開できたりするため、ダメージの深刻さが分かりにくいという特徴がある。

中山講師は「脳細胞のミクロレベルの傷みはCTやMRIでも分からない。精密検査をして画像に何も映っていないから『異常なし』と判断するのは単純すぎる」と、まずは脳震とうを起こした選手の競技復帰は慎重で



弁護士のリレー講義

あるべきだとした。また、スポーツ競技が数多くあるように、それによる脳震とうの症状も多岐にわたり、よく知られている症状ではないから「脳震とうではない」と判断したり、「頭痛が止んだのもう大丈夫」と短期間で競技復帰させる危険性にも言及した。

「主力選手が欠けるとチーム戦略自体の練り直しを迫られるので、どうしても早期復帰を目指しがちだが、体は動いていても脳は修復していないこともある。ダメージを抱えたまま競技を続けると脳震とうを繰り返しやすいくなり、脳認知機能障害でキャリアをつぶしてしまいかねない」とアスリートの将来を考えた対応を求めた。選手の頭部傷害に適切に対処するには事前準備が必要で、意識障害を評価できる人員を確保しておくことや、近隣の脳神経外科とつながりを持つて緊急入院先の病院を決めておくなど、「エマージェンシーアクションプラン」の必要性について述べた。

講義終了後は、医療従事者向けの脳震とう評価ツール「SCAT5」を実践するワークショップを実施した。2人ペアになって、症状の聞き取り、記憶能力確認、歩行状態の検査などを体験し、中山講師は会場を回って個別にアドバイスをを行うなどし、参加者らは医学的知見を実践することができた。



2人ペアになったワークショップ

サンライズキャンプ2019

東日本大震災の被災地でボランティア

大阪体育大学社会貢献センターが主催して9月15日～18日、東日本大震災被災地の復興支援をするボランティア活動「サンライズキャンプ2019」を福島県南相馬市で行った。今年は15人の学生が参加。高齢者向けにはゲートボールをしたり体力測定を実施、小学生とは運動交流会で一緒に汗を流したりマット運動の指導を行った。被災地を見学して地元の人から話を聞く機会もあり、学生らはそれぞれの思いを胸に刻んだ。参加学生らの感想を紹介する。

春日愛

(教育学部 小学校教育コース
4年生、サッカー部)

サンライズキャンプでは、テレビのニュースや新聞などでは伝わり切らない出来事について、真実を聞いてきちんと理解することや、未だ復興の進んでいない地域の実情をこの目で見たうえで、ボランティアは被災地の人々とどう接するべきなのか考えるきっかけにしたいと思っていました。

終えてみて、この3泊4日は本当に未体験なことばかりで、沢山の感情を使いました。何かを与えたい、

そんな思いを持っていましたが、結果的に与えられるものばかりでした。そして、このサンライズキャンプを通して、少しだけ自分のことが好きになりました。行動することって本当に難しい大変なことだけれど、行動を起こした後はその分だけ学びがあることを、身をもって経験しました。そして、この3泊4日間の行動を共にした仲間と教員の皆さんと出会うことができました。この経験で終わるのではなく、次は語り継いでいきたいと思っています。



小学生にマット運動を指導



高齢者向けの運動指導

大瀬 章裕

(体育学部 体育科教育コース
3年生、ソフトボール部)

沿岸部を車で走ると人影はなく雑草が生い茂り、木がまばらに立っていた。ところどころ半壊した家や誰も住んでいない家がポツンと建っており、そこに新しくできた堤防が真新しすぎて異様な雰囲気を感じ出していた。廃校になった小学校では、津波や避難について代々伝えられていたから死者が出さなかったと聞き、

実際に体験した人たちから次世代に伝えられ教訓となり、人の命を守ることができると再認識できた。

スポーツを通して小学生から高齢者まで関わることで、得意不得意はそれぞれあるけれど、みんな一緒に体を動かしてコミュニケーションを取りながら活動する場合は、人との距離を近くし良い雰囲気に包まれていたと感じた。スポーツの力、可能性ってやっぱり無限に広がっていると感じることもできた。

佐野 日奈子

(体育学部 健康・スポーツマネ
ジメント学科2年生、サッカー部)

私は今回の活動で本当にたくさんものをもらった。現地の人からは経験と教訓を、先生や先輩からは人への接し方、人前でのしゃべり方、あいさつや指導案の大切さを。現地で新しい友達もできて、その活動に胸打たれた。今回行けなかった人達にも体験してほしい。自分たちも伝えてはいくけれど、実際に行ってみて

しか感じられないこともある。出会ったおじいちゃん、おばあちゃんの中に「毎年この測定のために体力作り頑張ってるんよね!」と言ってくれる人がいる。「また来年も来てねお姉ちゃん!」と期待していてくれる子供たちと保護者の方々、こんなたくさんの人たちが待つてくれている。支援活動が終わるのは、福島が被災地と呼ばれなくなった時だ。福島・南相馬・津波・被災地となった時が、終わりの時なのではないかなと思う。

3年生向け

キャリアフェスタ

多様な仕事について知る

就職活動に備えて様々な業界の「仕事」について知る3年生対象のキャリアフェスタが9月24、25両日、行われた。物流、金融、食品、機械、医療、教育など計26種の業種について、それぞれ派遣された講師が説明するスタイル。C号棟の教室に分散して各業種が1日4回の講座を実施、学生は関心がある業種を選び2日で8業種の講座を聞くことができる。講師には大阪体育大学の卒業生もあり、仕事紹介だけでなく就職活動のアドバイスもしていた。



ポンプ」が採用されており、快適な生活を支える「緑の下の方持ち」ぶりが紹介された。講師は「ツルミポンプは誰でも知っている有名企業ではありませんが、海外45の国、地域に生産拠点、販売拠点をもち、技術は高

く評価されています」とさらにグローバルに成長する可能性を述べた。教員を目指す学生向けの講座では、大阪府内の小学校に勤務する大阪体育大卒業生の女性教諭が「2年生を受け持っています。給食の時間にエプロンを振り回して暴れたり、上履きを履こうとしなかったり、勉強を教えるだけでなく行動規範も指導しなくてはなりません」と教室の様子を率直に語った。「子供たちは私の発する一言一言にすごく反応します。1人の子供を『良くできたね』ってほめると、みんなが一斉に真似します。毎日ドタバタの生活ですが、子供は本当に可愛いです」と教員として働く喜びを伝えた。

3年生向けのキャリアフェスタは「知らない世界を知ろう！」をテーマに毎年この時期に開催されている。就職活動が来年に迫った学生たちは真剣そのものの表情で講師の話に聞き入り、自身の将来像を頭に描いていた。



子供たちと運動交流会

田中千晶

(教育学部 小学校教育コース
2年生、バレーボール部)

被災地を訪れて最初に感じたことは、「復興」とは何かということだった。ある牧場に行けば、本当に震災から9年が経ったのかと疑うほど、私たちに向けて地震や津波、原発や政府への怒りや思い

を、尽きることなく語る方がいた。ある畜産農家に行けば、餓死した牛が空腹に耐えきれずに食べてボロボロになった柱を前に、声を殺して涙を流す方がいた。今、被災地に必要なのは、被災者の心に寄り添い、明るい未来に向かって共に歩んでいくことではないだろうか。活動を終え何ができたのかを考えると、3世

代交流運動会や体力測定など様々な活動をする中で、たわいもない会話から笑顔が生まれ、人と触れ合う楽しさを改めて思い出してもらったことができたのではないかと思う。震災から止まったままの気持ちや生活から、被災地の人々が少しでも前に進めるようなきっかけとなったのならとてもうれしい。



体力や認知機能を測定



みんなで楽しくダンス

大自然と闘い、大自然に抱かれ

野外活動部 創部50周年

福田芳則部長が記念講演



福田芳則部長

大阪体育大学の野外活動部が創部50周年を迎え、12月7日、大阪市阿倍野区の都シティ大阪天王寺で記念式典と祝賀会が行われた。卒業生ら107人が参加し、恩師を囲んで学生時代の思い出話に花が咲いた。

顧問の伊原久美子・准教授（体育学部）が冒頭「1969年に発足し50周年を迎えられたのは、OB、OGをはじめ活動に関わってくださった皆様のお陰」と開会の辞を述べた。部長の福田芳則教授（同）は「極寒のキャンプや波風を受けながらのヨットなどの合宿で知識と経験を磨き、指導力や企画力を高める活動をずっと実践してきた。2011年には地域活動が評価され、財団法人日本キャンプ協会から学生団体としては日本で初めてキャンピングアワードを受賞。これからも野外の楽しさ、価値を世の中に広めていくことを誓います」とあいさつ。現役部員25人を代表し4年の今村樹さんが「先輩方が残した資料を振り返り参考にすることもある。50年間で積み上げて

きたものの大きさや責任を改めて感じている。伝統と意思を受け継ぎ、常に新しい野外活動を探求してまいります」と宣言した。

1975年～2014年まで野外活動部の指導にあたった永吉宏英・前部長は「監督、部長として関わらせてもらった幸運に心から感謝したい。今、壇上から会場を見渡すと、一緒にキャンプで汗を流して頑張った仲間の顔が見える。楽しかった。みんな本当によりがとう」と涙を浮かべ、声を詰まらせながら祝辞を述べた。OB会の水流寛二会長は「卒業して36年経つが、北アルプスの星空の下での生活、音もない一面真っ白な世界で1人朝を待つ、あの経験は間違いなく今も生きている。現在、発達に障害のある子供たちとキャンプ活動している。ライフワークとしてもっと社会に発信し続けたい」と語った。

記念講演は、42年にわたって野外活動部を指導し、今年度で大阪体育大を退任する福田教授が「私と野外活動部 42/50年」と題して振り返った。学生たちとの

思い出の中では、空気の薄い山上で点滴を受ける破目になったり、缶ビールが凍り付く寒さの中で指が凍傷になって大騒ぎしたことなどを披露し、当事者の元学生たちは自席から「すいませんでした！」「申し訳ありません！」と声を上げて会場は爆笑。「生活環境の厳しいキャンプ、克服的、挑戦的な活動プログラムは、社会人としての基礎的な力を養う」とし、最後に「たかが野外、されど野外、この道に始めありて、終わりなし、この道こそ我は活きる」との言葉で締めくくった。

1983年4月に入部した顧問の池島明子教授（同）は「個性ある先輩、面白い後輩、頼れる同期、先生方に恵まれた。野外活動部では、やる気、負けない気に加え、いくら飲んでもつぶれないアルコール力を身に着けた。福田先生のいない野外活動は不安でいっぱいですが、みんなとともに頑張っていきたい」と閉会の辞を述べて終了した。



永吉宏英前部長



水流寛二OB会会長



伊原久美子准教授



今村樹（4年）



池島明子教授



大学院・スポーツ科学セミナー

多彩な講師で講座充実

毎週月曜 教職員、学生も聴講OKで人気

大学院の「スポーツ科学セミナー」が今年度も9月から始まった。スポーツや健康に関する分野の第一線で活躍する人を講師に招聘するもので、大学院生だけでなく教職員や学部生も聴講できる。活発に質疑も飛び出し、フロンティアスピリット溢れる講座として定着している。

今年度のスポーツ科学セミナーは毎週月曜日に行われ、2019年9月30日～2020年1月27日の計15回。



新次元スポーツの意義を語る安藤・超人スポーツ協会ディレクター



人気マラソンシューズの秘密を語る柳谷・順天堂大准教授



国際競技力向上への取り組みを説明する清水和宏・国立スポーツ科学センター研究員

「超人スポーツが生み出す社会的価値」と題した講座では、超人スポーツ協会の安藤良一・ディレクターが、超人的な力を持つような機器の力を借りて実施する競技の魅力を語った。聴講者との間で「超人スポーツはスポーツなのか」「話題のマラソンシューズがもたらす効果」の講座では、順天堂大学の柳谷登志雄・准教授が、地面からの衝撃を和らげ、なおかつ軽くて体への

負担が小さいシューズの秘密を披露。東京オリンピックまで1年を切ったこともあり、「国際競技力向上」をテーマにした講座も3回行われ、トップアスリート向けの最先端の研究やサポートが紹介された。年明けは、「画像を用いた身体運動の3次元分析」「科学技術とスポーツの倫理」などの講座が行われる。



◆◇勉強の秋、スポーツの秋、芸術の秋と様々に言われる学びの季節、本学関係者も大忙しでした。学術・研究の方面では、国際体操科学フォーラムの主催をはじめ、各地のシンポジウムなどに積極的に参加。学生のクラブ活動などは、ハンドボール部女子がインカレ7連覇の快挙を成し遂げました。このほか、本誌で紹介し切れませんでした。インカレで入賞したり、表彰された学生も多々。自ら掲げた目標に青春を燃やす学生たち、取材してその若さとひたむきが眩しいです◆◇2019年は日本で開催されたラグビーW杯で日本代表チームが史上初めてベスト8入りし、ラグビーに沸いた年でもありました。チームを支えたマネージャーの大村武則さんが本学卒業生という縁でインタビューする機会に恵まれました。大村さんカッコ良かったですよ。同い年の私は、もうオバサンだし……などと萎びてはいはいかと大変、刺激になりました。何歳なのはこの歳で敢えて明らかにしませんが、田中角栄が総理大臣になった歳です！人生の本番はここからだと言いたく聞かせておきます（涙ぐましい？）◆◇2020年は2度目の東京オリンピックとパラリンピック。本学の学生や卒業生が日本代表に選ばれるかどうか、気になりますね。代表になれるか、メダルを取れるか、アスリートたちの渾身のパフォーマンスを追いつつ、それを支える陰の人々の存在にも目を凝らしていきたいと思えます。こういうことが気になるのも、今春から本学、本誌での仕事に関わるようになったからです。私が元いた新聞社では自身の原稿へのこだわりを「神は細部に宿る」と教えられました。本学関係者の皆様は、オリンピックの細部に宿る神をどこに見るのでしょうか。2020年は自身の神をゲットする年にしましょう!!

【和泉かよ子】



極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】

- スポーツ科学研究科
博士（前期・後期）課程

【体育学部】

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】

- 教育学科

大学事務局

庶務部、教学部、入試・広報部
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設

図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター

支援組織

教養教育センター、キャリア支援センター
教職支援センター、学習支援室
学生相談室・カウンセリングルーム

<https://www.ouhs.jp>